

【子どもの事故に関する統計について】

郡山地方広域消防組合管内において過去10年間（2013年（平成25年）から2022年（令和4年まで）で、0歳から12歳までの子どもを「一般負傷」または「溺水」により1,787人救急搬送しました。

家庭内及び外出先での事故の注意喚起を図るため、子どもの事故に関する救急統計をまとめましたのでお知らせします。

※ 小数点を含むものは、小数第二位を四捨五入した数値。

※ 事故区分は「転倒」、「転落」、「ぶつける」、「誤飲」、「切る・刺す・挟む」、「熱傷」、「溺水」、「その他」で分類する。

※ 子どもの区分は下記のとおり分類する。

「新生児」・・・生後28日未満の0歳児

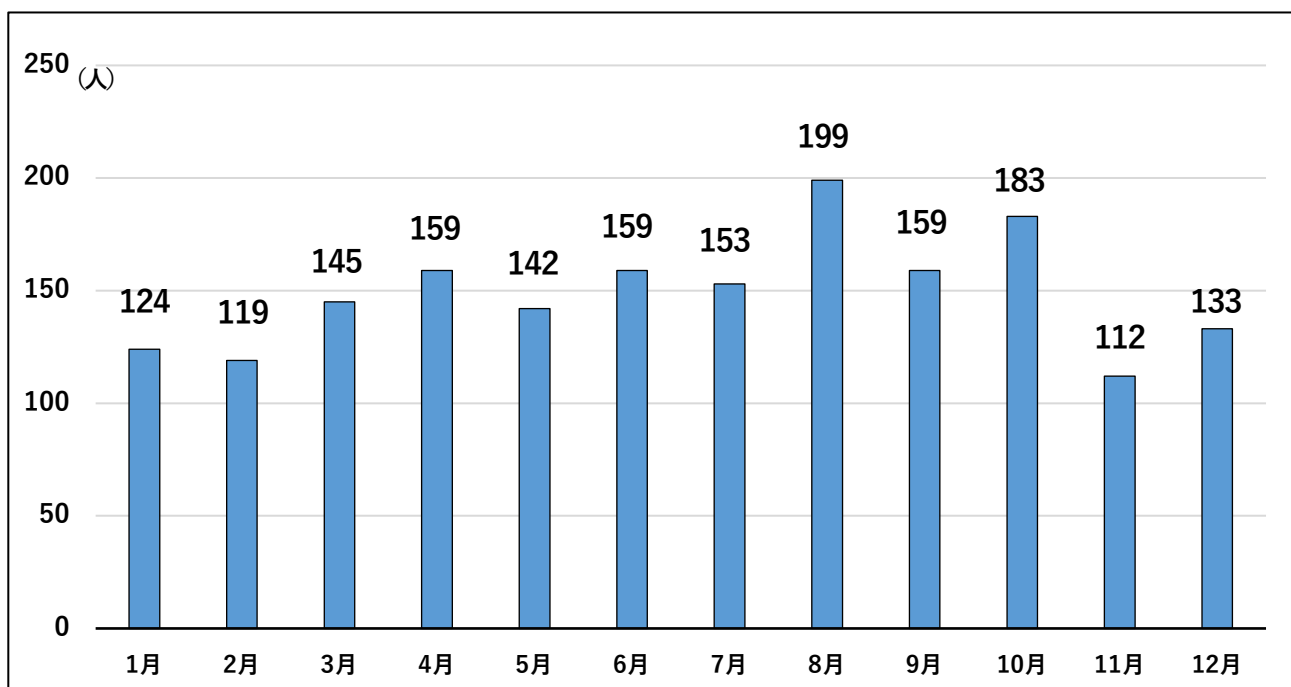
「乳幼児」・・・生後28日以上、満7歳未満

「少年・少女」・・・満7歳以上、満12歳以下

1 発生月別の救急搬送人員

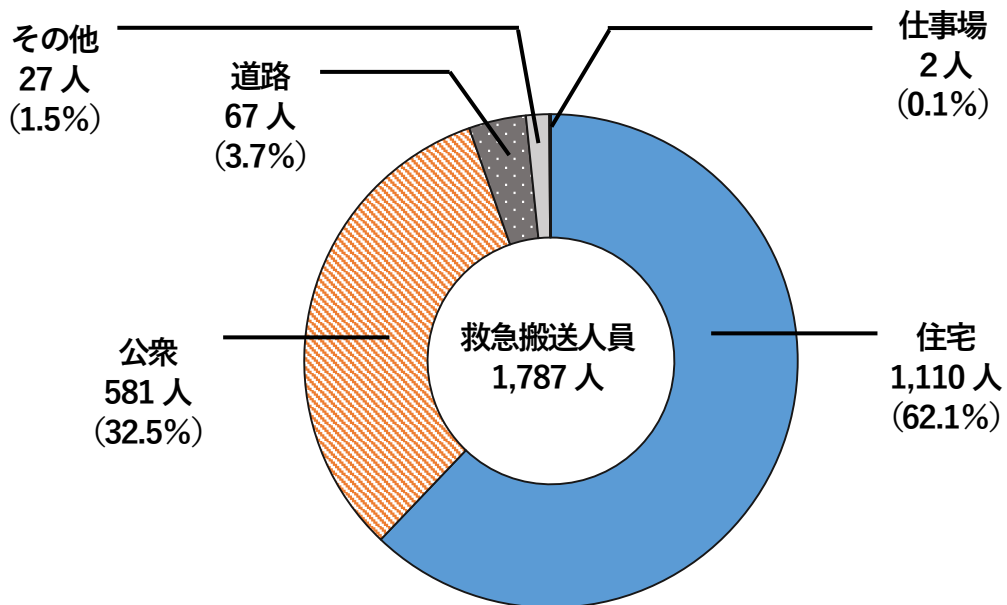
郡山地方広域消防組合管内では過去10年間（2013年（平成25年）から2022年（令和4年まで）で子どもが受傷した事故により1,787人救急搬送しました

発生月別の救急搬送人員をみると、8月が199人（11.1%）と最も多いことがわかります。



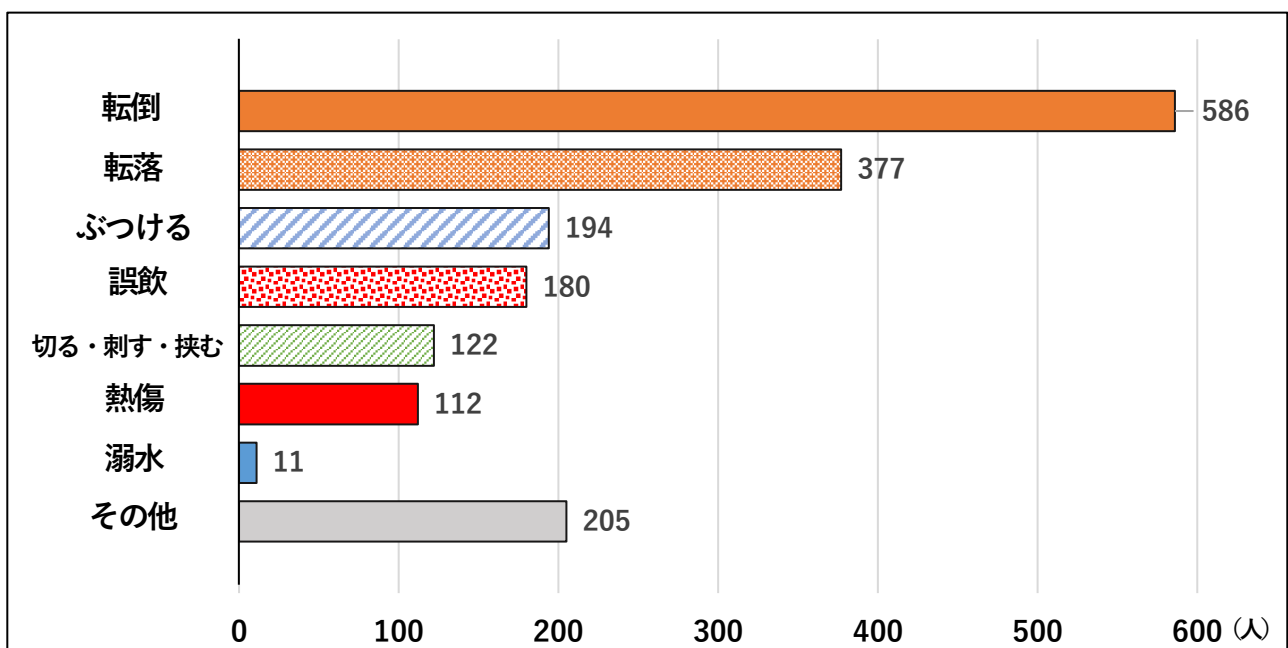
2 発生場所別の救急搬送人員

過去10年間で子どもが受傷した事故により救急搬送した人数を発生場所ごとにみると、住宅での発生が1,110人(62.1%)と6割以上を占めていることがわかります。住宅内で保護者が目を離している際に受傷しているケースがみられます。



3 事故区分別の救急搬送人員

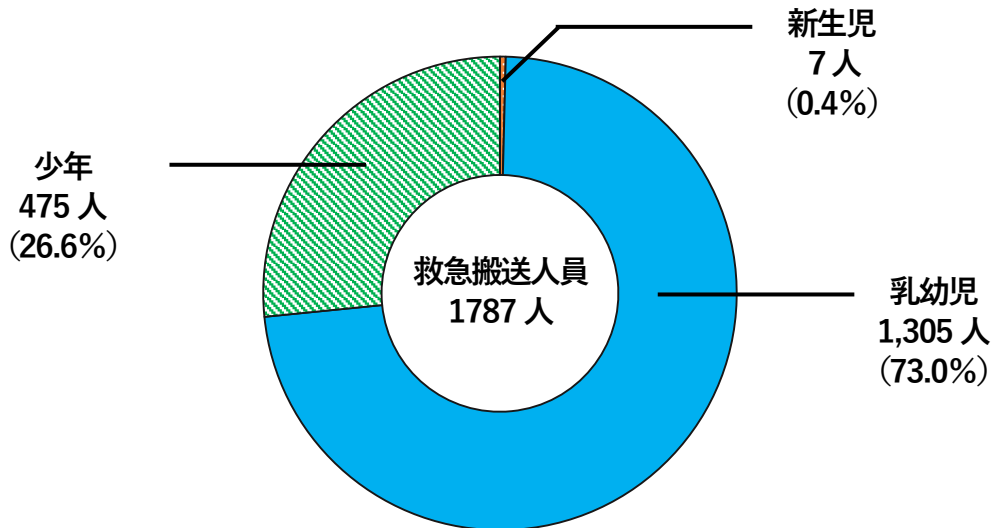
過去10年間でこどもの事故により搬送した1,787人を事故区分別にみると、「転倒」が586人(32.8%)と最も多く、次いで「転落」が377人(21.1%)と続くことがわかります。



4 年齢区分ごとの救急搬送人員

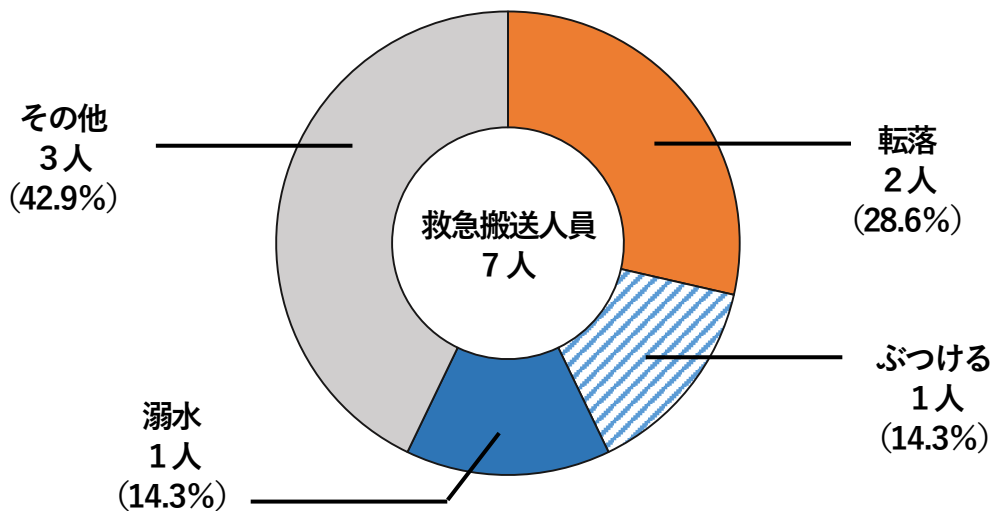
(1) 年齢区分ごとの救急搬送人員

1,787 人を年齢区分ごとにみると、乳幼児が1,305 人（73.0%）と最も多いことがわかります。



(2) 新生児

新生児の事故による救急搬送人員は過去 10 年間で7 人となっています。新生児は自ら寝返りや歩行はできないことから、いずれの事案についても保護者など周辺の人物が関わり発生しています。



【事例】

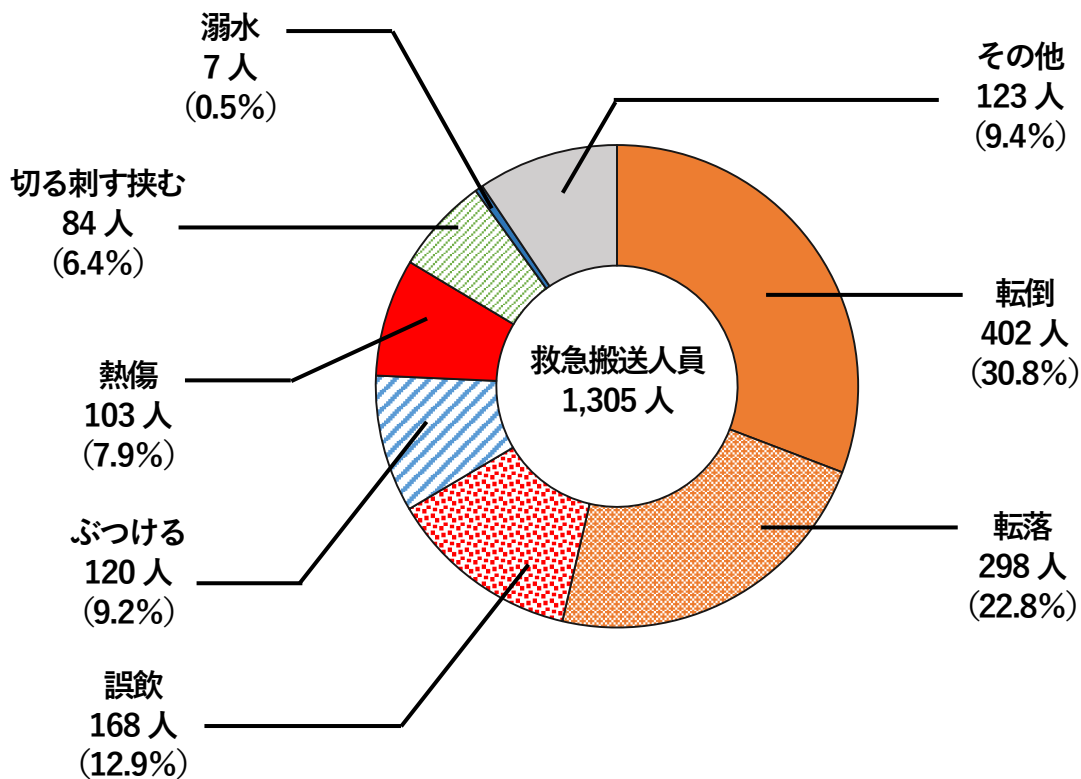
- ・ 入浴中うつ伏せの体勢にして体を洗っていたところ、顔が浴槽に浸かってしまい、溺れたと思い救急要請。（軽症）
- ・ 父親に抱きかかえられて移動中、家具の角に頭をぶつけてしまい受傷（軽症）

(3) 乳幼児

乳幼児の事故による救急搬送人員は1,305人となっています。乳幼児は周囲の環境に対する好奇心が強く、大人が見ていない間に思わぬ行動をとり受傷するケースが見られます。

最も多い事故区分が「転倒」で402人(30.8%)となります。乳幼児は運動機能が未発達であり、転びやすいとともに手をつくなどの受け身の行動が吐嗟にできないことが一因と考えられます。

さらに、乳幼児の事故区分の特徴として「誤飲」が挙げられます。乳幼児の搬送で3番目に多く、168人(12.9%)が救急搬送されています。



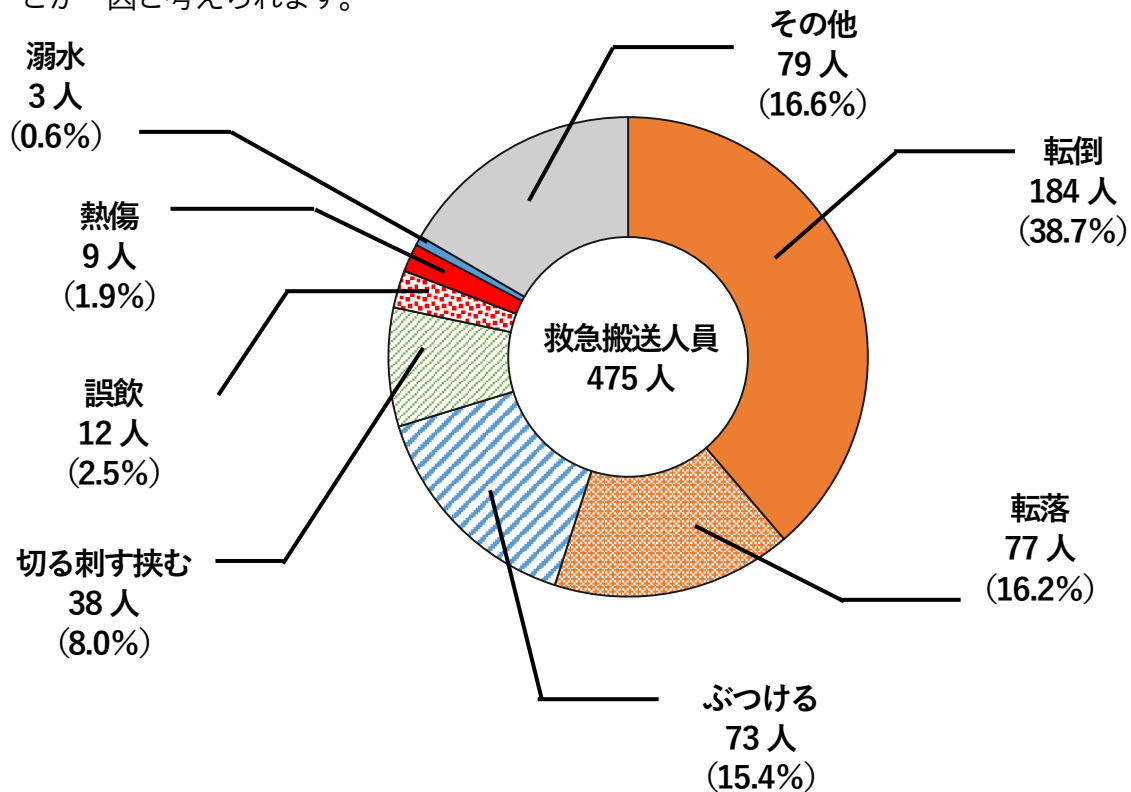
【事例】

- ・ 砂場内で転倒し、砂場の木杵に顔面を打ち受傷したもの。(4歳・「転倒」・中等症)
- ・ 自宅で約1mの高さの椅子から転落。床面に後頭部を打ち、一時的に意識を消失したもの。(1歳・「転落」・中等症)
- ・ 自宅台所でたばこの吸い殻のに入った水を誤って飲み、その後腹痛と嘔吐を呈したため救急要請したもの。(6歳・「誤飲」・中等症)

(4) 少年・少女

少年・少女の事故による救急搬送人員は過去10年間で475人です。少年・少女の年齢区分でも「転倒」が184人(38.7%)と最も多いことがわかります。

また、少年の事故区分の特徴は「ぶつける」、「切る・刺す・挟む」が合わせて111人(23.4%)と「転倒」、「転落」に次いで多く、これは乳幼児と比較してより活発な年齢であることや、学校やスポーツなど活動の幅が広がり、遊びや授業で様々な道具を使用することが一因と考えられます。



【事例】

- ・ 屋内スケート場でスケート中に転倒。左足の痛みにより歩行困難のため救急要請したものの。(9歳・「転倒」・中等症)
- ・ 教室内から走って出る際、ドアに付属の窓ガラスに誤って右腕をぶつけガラスを突き破り受傷したものの。(11歳・「ぶつける」・中等症)
- ・ 鉋で薪割りを手伝っていたところ、誤って左手を切ってしまったもの。(9歳・「切る刺す挟む」・軽症)